

『溺愛社長と子育てスケッチ』

著：雨月夜道

ill：明神 翼

翌朝。晩秋の涼やかな空気に促されるように、マンションの前に生えている街路樹の銀杏が綺麗に色づいた。そして、

「わあああ！」

その銀杏が震えるくらいの悲鳴が、マンションの一室、莞介の寝室から上がった。

スマートフォンのアラームに促され、寝惚け眼を擦りつつ上体を起こした途端、こちらに向かって倒れてくる本の山が、視界に入ったのだから無理もない。

寝起きな上に運動神経皆無の莞介に、「とっさに避ける」だなんて芸当ができるわけもなく、本の集中投下をもろに喰らってしまった。

ほとんどが文庫本だったが、中には分厚いハードカバーのものもあったからかなり痛い。

「う、うう……い、たい……っ！」

本の角が当たった頭を押さえて悶えていた莞介は、即座に飛び起きた。赤ん坊の泣き声が聞こえてきたからだ。見ると、自分より少し離れたところで赤ん坊が泣いていて、そのお腹の上には文庫本が載っている。

「わああ！ 大丈夫か？ 怪我とかしてないか？ ……よかったあ。驚いただけか」

怪我がないことを確認して胸を撫で下ろすが、赤ん坊はまだ泣きやまない。

「ああ。怖かったか？ 大丈夫。もう怖くないから……」

「ばうばう！」

「ふああ。あくびが『おむつじゃにゃいか』と言っているぞお」

いつの間にか部屋に入ってきたあくびが、鼻をくんくんさせながら啼き、そのあくびの背中の上で丸まったままのナツメが欠伸交じりに言う。

おむつを確かめてみると……あくびの言うとおりの、おむつだった。

慌てておむつの替えを取りに行こうとしたが、散乱した本に滑ってずっこける。

ナツメたちは盛大な溜息をついた。

「全く、己の世話も満足にできん分際で、よく赤子を預かる気になっちゃったものである」

「あ……はは。おっしゃる、とおりです」

苦笑しつつ、どこかに置いたおむつを探す。その間、莞介は昨夜のことを思い返した。

久瀬と一緒に暮らして、赤ん坊の面倒を見る。ありがた過ぎる申し出だが、頼むことはそうそうないと思っていた。それなのに、拾った赤ん坊とともにマンションに戻った後、久瀬が危惧したとおりの事態になった。

誰もこの子のことを知らないし、この子が何の妖怪なのかさえ分からない。知り合いの妖怪に

も訊いてみてくれるそうだが、すぐには見つからないだろうとのこと。

唯一の救いといえば、赤ん坊が粉ミルクを飲んでくれたことぐらい。

食べ物は人間の赤ん坊と同じようで、そこには安堵したが、この子がなかなか元気な子で、ちょっと気を抜くとどこまでもころころ転がっていったり、何でも口に入れようとしたりするから目が離せない。莞介の部屋は色んなものが乱雑に置かれているから余計に。

——莞介！ おむつを替えている場合ではにゃい！ この赤子、今口のにゃにか入れたぞ！

——ええっ？ お前、何食べて……わああ！ 寝返り打ちながらおしっこしないで！

赤ん坊を部屋に連れてきて二時間も経たないうちに、相楽家は阿鼻叫喚に包まれた。

その最中に、久瀬からの着信。赤ん坊の家族捜索がどう進展したか、気になってのことだろう。でも……。

——おい。にゃぜ出てやらん。この赤子を心配しての連絡ではにゃいのか？

——は、はい。そうなんですけど……実は、久瀬に言われたんです。この子を預かることになったら、俺の家に来い。そしたら家事の負担だけでも補ってやれるからって。だから、今の状況を話したら、久瀬が何て言うか……あ！

莞介は声を上げた。ナツメがスマートフォンに駆け寄り、通話ボタンを肉球で押したのだ。

——もしもし！ 吾輩、莞介の同居人のニャツメである。にゃ、にゃんでもいいから助けてくれにゃのである！

——！ ナ、ナツメさんっ。そんな、勝手に……わあ！ そっちに行っちゃ駄目。

止めようとしたが、赤ん坊が本の山に勢いよく転がっていくものだから制止できず。

ようやく宥めて大人しくさせた頃には、何をどう話したのか分からないが、明日から久瀬の家に住む段取りがすっかり出来上がってしまっていた。抗議しようとしたが、

——久瀬に悪いと言うが、では、我らには悪いとは思わにゃいと？

そう言われては何の反論もできない。ナツメの言うとおり、自分が突然連れ帰ってきた赤ん坊のせいで、ナツメたちは多大な迷惑を被ってしまっている。

「すみません」と謝ると、ナツメたちは首を振った。

——てんやわんやではあるが、お前のしたことが間違っているとは思わん。お前のその性分のおかげで、吾輩もあくびもくしゃみも、今こうして生きているわけだし……我らもお前と同じ状況になったら、この子を連れ帰って、どうにかしてやりたいと思ったに違いにゃい。そして、この子を目の前にした今、放り出すにゃど考えられん。

——ナツメさん……。

——それににゃ、久瀬という男、一本調子で不愛想極まりにゃい喋り方だが、莞介のことも赤子のこともしっかり気遣って心配していた。あの男にやら大丈夫である。まあ、莞介が一番の親友だという男にゃのだから、最初から分かっていたことで、だからこそ、吾輩も電話に出たのだがにゃ。

ナツメのその言葉に、熱いものが内から込み上げてきた。

——ナツメさん……！ ありがとう、ございます。久瀬をそんなふうにしてきて……。

——だからにゃ、我らも金持ちセレブの億ションについていくぞ！

——はい。一緒に行きましょう。金持ちセレブの……は？

復唱しかけて莞介は間の抜けた声を漏らしたが、ナツメたちは気づきもせず、

——セレブの社長が住むマンションにゃのだから、億ションに決まっている！ 吾輩やあくびたちがいても全然余裕と言っていたから……夢が広がるのである！

——ば！ ば！ う！ ば！ ば！ う！

莞介のスマートフォンで「セレブ」を検索して興奮するナツメに「セ！ レ！ ブ！ セ！ レ！ ブ！」と啼きながら目を爛々と輝かせるあくびとくしゃみ。そして今。

「さてと、吾輩たちも準備準備。億ションにお泊まり～。億ションにお泊まり～」

あくびたちの「セレブコール」に合わせてそんな鼻歌を歌いながら、お泊まりの準備を始めるナツメ。他の妖怪たちも、「いいところだったら遊びに行くね！」とはしゃぎまくる。

その姿を見ると色々微妙な気持ちにならなくもなかったが……思わずスケッチしたくなるほど可愛いから憎めない。

と、本当にスケッチしつつ胸に去来するのは……強い自己嫌悪。

まさかこんなに早く、ナツメたちまで引き連れて、久瀬と暮らすことになるなんて。

しかもこれから、久瀬が昼休みに会社を抜け出して、莞介たちを車で家まで送ることにまですべてなっていたり……。

一人ではろくな世話はできないから。荷物を背負い、赤ん坊やナツメたちを連れ歩いて久瀬の家まで行くななんて無理だから。分かってはいるが、何というおんぶにだっこ。

自分の行動に責任も持てず、久瀬やナツメたちに迷惑ばかりかけて……我ながら何と情けない。自分で自分が嫌になる。だが、そうはいつでも……。

『あぶぶう！ だあだあ』

親が見つかるまで、この子の面倒を見ると決めた以上、己のメンツなど気にしている場合でない。みっともなくとも何でも、この子のために自分ができる最善を尽くさねば。

赤ん坊を抱っこして感じる柔らかくて脆い感触を噛み締めながら、自分に言い聞かせた。

それから程なくして、インターホンが鳴った。出てみると久瀬だったものだから、莞介は目を丸くした。

「久瀬！ どうして……時間、まだのはずじゃ」

「思ったより早く会議が終わったから来た。荷物を運ぶのを手伝おうと思ってな。赤ん坊を抱いてじゃ、運ぶのは無理……っ」

「おお！ 気が利くではにゃいか！」

久瀬の言葉を遮り、ナツメと、ついでにあくびたちが飛んできた。

「こんにゃにたくさんの荷物、一体どうするつもりにゃのかと思っていたのだ。莞介はこういうところに一々疎いから……うむうむ、頼もしい限り」

「……あ」

うんうん頷いているナツメと、お尻ごと尻尾をぶんぶん振っているあくびたちに、久瀬がわずかに目を見開く。

「うん？ 久瀬、どうかしたか？」

「……見える。……聞こえる」

ぎこちない手つきであくびたちに手を伸ばす。瞬間、くしゃみが思わずといったように「ばう！」と啼いて、久瀬の掌に右の前肢を乗せた。その前肢をじっと見つめ、

「……触、れる」

掠れた声を漏らす。莞介は目をぱちくりさせた。

「え？ ……ああ。普通の動物から妖怪になった猫又や、石像を依り代にしてる神獣は、普通の人間でも見えるし聞こえるから……って、言ってなかったっけ？」

「いや……昨日、ナツメさんから聞いた。だが、実際こうして目の当たりにすると……すごく嬉しい。相楽が見ている世界を、初めてこの目で見ることができた」

「！ 久瀬……」

息を呑む莞介に、久瀬はほんのわずかだが両の目を細め、ナツメたちに目を向けて、

「皆、相楽が描いたとおりの人たちだ」

すごく可愛い。極々自然な口調で、さらりと言った。

ナツメたちはぼかんとしていたが、しばらくして耳の中を真っ赤にして身悶え始めた。

「か、かわ……っ！ ば、馬鹿者めっ。我らは日本男児である。かかか可愛いにやどと言われても、全くもって嬉しくは……っ」

二本の尻尾で床をべしべし叩きながら早口にまくし立てていたナツメが、ピンッと耳を立てた。近づいてきた久瀬に、顔を覗き込まれたからだ。

「ありがとうございます」

「にゃ？ 一体にゃんのこと……」

「こうして、俺に姿を見せてくれたのは、俺を信じてくれたってことだから」

嬉しいです。いつもどおりの淡々とした声音と表情で、そう言った。

途端、ナツメたちの動きが止まった。固まったまま、「は、はあ……」と間の抜けた声を漏らすと、久瀬は深々と頭を下げた。

「久瀬千景です。しばらくの間、よろしく願いいたします」

礼儀正しく挨拶すると、久瀬は莞介へと向き直った。

「持っていく荷物は？」

「へ？ あ……これだけ……あ」

「積んでくる」

端的に答えると、久瀬は衣類の入ったバッグを持ち、さっさと部屋を出て行ってしまった。

ナツメたちは依然固まっていたが、ドアが閉まるなり、莞介に駆け寄ってきた。

「か、莞介！ あいつは一体にゃんにゃのだ！ あんにゃ台詞をあんにゃ真顔で淡々と……恥ずかしいったらにゃい！」

「ば、ばうばう」

皆して前肢で目許を押さえて、もじもじと縮こまる。そんなナツメたちに、莞介も「同じです」と、顔を赤くして縮こまった。

——すごく嬉しい。相楽が見ている世界を、初めてこの目で見ることができた。

(そうか……俺、初めて……俺だけが見ている世界を、久瀬に見てもらえたんだ！)

心が馬鹿みたいに打ち震えた。幼い頃からずっと、久瀬に自分の見ている世界を見せたいと思っていたから。

それに、普段ほとんど動かない表情筋が動いて浮かべられたあの笑顔。とても控えめではあったが、嬉しそうなのがはっきりと伝わってきて……！

「お、おい、莞介！ おさにゃにゃじみのお前が一番呆けてどうする。しっかりしろ！」

ナツメからそんなツッコミを入れられるくらい舞い上がってしまった。

だが、すぐに……そんな喜びが軽く吹っ飛ぶようなことを久瀬がやらかした。

まずは車。姿を消したナツメたちと、赤ん坊を連れて駐車場に下りると、久瀬の車があの青いスポーツカーから、ファミリーカーのような大きな黒い車に代わっていた。驚いてそのことを尋ねてみると、

「ああ。あの車じゃ皆乗れないからな」

真顔でそう言った。しかも後部座席には、「赤ん坊を車に乗せるのだから当然」と、やたらと立派な回転式のチャイルドシート完備。

これだけでもかなり驚いたのだが、こんなのは序の口。

案内されたのは、高級マンションが建ち並ぶ街中にでんと聳え立つタワーマンションで、数人のコンシェルジュが出迎えてくれた広いエントランスには、滝まで流れていた。

案内された久瀬の部屋も……まさかのワンフロア。

ピカピカに磨かれた大理石の玄関。吹き抜けや、摩天楼を一望できる大きな窓がある、三十畳以上ありそうなリビング。莞介の部屋より広いアイランドキッチンやバスルーム。木や花が植えられた、池まである中庭などなど。

部屋数は軽く十を超え、それら全部の部屋が、壁紙から調度品、家具に至るまでモダンでシックなものできっちりと統一され……そのどこまでも完成された空間は、さながら一流ホテルのよう。と、部屋を案内されながら呆気に取られていると、

「それから……これは、急いで作らせたもので申し訳ないんだが」

そう言って、ベビーベッドや子ども用の家具、おもちゃを揃えた立派な子ども部屋まで見せてくるものだから、とうとう口をあんぐり開いてしまった。

「あ、あ……こ、ここまで……用意、してくれたの？」

「ああ。俺たちは育児未経験者だからな。こういう準備はできるだけしておいたほうがいい」

事もなげに久瀬は言った。いや、正論ではあるが、何というか……。戸惑っていると、あくびが「ぼうぼう」啼いた。

「にゃに？ 『お掃除が大変そう』だと？ あくびよ。大変そうではにゃい。絶対大変のはず」

「掃除、洗濯、ごみ捨てなどの家事はマンションのほうでやってくれます」

「そうそう。プロに任せにゃいとやってられにゃ……はあ？ やってくれるっ？」

驚きの声を上げるナツメに、久瀬は淡々と頷く。

「はい。オプションのサービスです。だから、相楽たちを呼んだんです。ここにいれば、家事は全部業者がやってくれる」

「……っ」

莞介は小さく息を呑んだ。しかし、誰もそのことには気づかず、話は進んでいく。

「え？ お、おふ……？ ……そ、そんなにものまでついて、この部屋一体いくら」

「さあ。税金対策の一環として会社で買ったものなので、詳しいことは……」

久瀬は口を閉じた。久瀬のスマートフォンが鳴ったのだ。

「失礼」と断って電話に出ると、久瀬の形の良い眉がわずかに動いた。

「……はい。……分かりました。すぐに戻ります。……相楽、悪い。急いで戻ることにになった」

「へ？ あ……う、うん」

呆気にとられ過ぎて、とっさにそれだけしか答えられない莞介をしり目に、

「俺の仕事部屋以外ならどこでも好きに使ってくれていい。とりあえず、七時には戻るつもりではいるが……また連絡する」

早口に言うと、久瀬は颯爽と出て行ってしまった。

久瀬がいなくなっても、皆固まって動けないままだったが、

「にゃんというか……別世界である」

しばらくして、ナツメが溜息交じりに言うので、莞介はこくりと頷いた。

確かに、何もかも別世界過ぎる。

この部屋自体もそうだが……必要なことだからと、一時的に預かるだけの赤ん坊のために、たった一晩で、チャイルドシート付きのファミリーカーどころか、立派な子供部屋まで用意してしまうなんて、とてもではないが自分にはできない。それから。

——だから、相楽たちを呼んだんです。ここにいれば、家事は全部業者がやってくれる。

「……。……本当に、別世界……っ」

莞介はびくりと肩を震わせた。突如、カーテンが独りでにしまったのだ。

見ると、テーブルの上に置いてあったリモコンに前肢を乗せたまま固まっているくしゃみの姿があったものだから、ナツメとあくびが一目散に駆け寄った。

「今のはお前がやったのか？ このボタンを押したのか……わあ！ 暖炉に火がついたあ」

「ば、ばうばう！」

いまだかつて見たことがない仕掛けに、三人はすっかり舞い上がって、嬉々として色んなボタンを押して遊び始めた。

その声に反応したのか、抱いていた赤ん坊が『きゃっきゃ』と笑い出した。誰かの笑い声を聞くと、自分も楽しくなるのだろうか？

(……優しい子)

「いい子だね」と、頭を撫でてやりながら、莞介はもう一度部屋を一つ一つ見て回った。

どの部屋も、見れば見るほど立派で、乱雑でだらしない自分の部屋とは大違い……いや。

住んでいる部屋だけではない。財力は勿論……価値観も違う。

いくら豪華で快適でも、こんな……一分の隙もなく、細部に至るまで全部が完成された……生活感が全くない、冷やかかで無機質な世界にたった独りで住むなんて、自分なら嫌だ。

でも、久瀬は何とも思っていないようだった。それに。

——だから、相楽たちを呼んだんです。ここにいれば、家事は全部業者がやってくれる。

「……」

久瀬が言ったこと、何も間違っていない。莞介も久瀬も忙しくて、こうすることが一番効率的で合理的。

正しくて、とてもありがたいことで……久瀬は赤ん坊や莞介たちを心から気遣ってくれている。分かっている。でも、なぜだろう。あの言葉を聞いた時、じくりと胸が痛んだ。

『ぶつぶぶう！ きゃっきゃっ』

「このおもちゃ、気に入ったの？ よかったね」

用意されたおもちゃに囲まれて大はしゃぎの赤ん坊を見ても治まらない。なぜか、刺すように冷たい風に打たれた時のような、ズキズキとした痛みが走って——。

『あ？ あうあ……ぶう！』

「……何だろうね？ この感じ」

沈む莞介に気づいたのか、不思議そうにこちらを見つめてくる赤ん坊に苦笑した。

それから、おもちゃで一通り遊ばせた後、今度はキッチンへと足を向けた。

ここもやはり、何もかもが綺麗に整頓され、汚れ一つなくて……まるで一度も使われたことがない新品のよう。

食事業者任せなのだろうか？ 何の気なしに冷蔵庫のドアを開く。

莞介は目を見開いた。冷蔵庫の中に、使いかけの調味料や食材、調理された料理が入ったタッパーなどが置かれている。

（久瀬。料理するんだ……あ）

あるものに目が留まった。それは、衣をつける手前のコロツケのタネ。一つずつ丁寧にラップで包み、タッパーに入れてある。量的に考えて、二人分。

（夕飯の準備、してくれてる……！）

しかも、献立は莞介が一番好きなコロツケ。そう思った途端、顔がすごく熱くなって、胸がドキドキした。そんなものだから、六時過ぎに久瀬から着信があって、

『すまない。帰るのは七時と言ったが、九時過ぎまでかかりそうだ。それで……デリバリーの説明をしていなかったと思うんだが……』

「いいよ！」

久瀬の言葉を遮り、大声を出していた。

「待ってる。久瀬のコロツケ食べたい……あ」

勢いよくまくし立てた莞介は、はっとした。久瀬の息を呑む気配が聞こえてきたから。

「あ、あ……ご、ごめん。冷蔵庫の中見て……あ。それに、疲れているなら他の日でも……」

『いや。……食べてほしい。待たせることになって、悪いが』

「！ う、ううん。こっちこそ、ごめん。でも……ありがとう」

た、楽しみに待ってる！ 声を上擦らせながらも答えて、莞介は通話を切った。

その後、寝かしつけた赤ん坊をナツメたちに託し、宛てがってもらったゲストルームの一室で

イラストの仕事にとりかかったが、心はふわふわと浮き立ったまま。

先ほどまで、原因不明のもやもやに悩まされていたくせに、馬鹿みたいに……。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>